



夢実現！ 小中連携を踏まえた 教育イノベーションへの挑戦



令和4年4月
益城町教育委員会



夢実現！小中連携を踏まえた教育イノベーションへの挑戦

児童生徒を取り巻く社会の状況が刻々と変化するとともに、児童生徒に関する教育課題が多様化し、複雑化してきている現代において、小中学校が連携して課題解決に当たり、学校教育の活性化に取り組むことがより一層求められている。

本来教育とは、児童生徒が未来に向かって自己実現できるように支援する営みであるべきであり、教師の役割は、児童生徒が自らの可能性に気づき、その可能性を伸ばす機会を創出することである。

振り返ると、これまでの小中連携の研究実践は、どちらかといえば理論研究に重きが置かれ、現場の教師が互いに切磋琢磨して課題解決に向かう実践にはなりにくく、実践的指導力を高め合い、充実感・達成感のあるものには至らなかった現状が見受けられた。

研究実践の意義は、目の前の教育課題を解決するために、日々、教師一人一人が試行錯誤して取り組み、その実践を通して、教師自らの人間力や教育力を鍛え磨いていくことであると考ええる。

本町における今回の小中連携研究実践は、これまでの研究実践の反省に基づき、新しい切り口で新たな研究実践の在り方を探求するものである。

益城町では、令和3年度から「夢実現！益城町ドリカムアクションプラン：「チャンス（chance）、チャレンジ（challenge）、チェンジ（change）」の下、次の4項目を重点取組事項として、小中連携の研究実践に取り組み始めた。

- 1 人権を尊重し、地域とともに創るコミュニティ・スクールの推進（学校に行くのが楽しみ！）
- 2 タブレットを活用したアクティブ ICT 教育の推進（タブレットを使うのが楽しみ！）
- 3 小中連携を図った、楽しく、魅力的で、夢のある英語教育の推進（英語の授業が楽しみ！）
- 4 楽しく・ためになり・試してみたいくなる魅力的な授業の創造（授業を受けるのが楽しみ！）

そして令和4年度は、上記の4項目を研究実践の中心に据え、研究テーマを「夢実現！小中連携を踏まえた教育イノベーションへの挑戦 ～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～」として、小中連携教育活動のさらなる研究実践に取り組むこととした。

イノベーションとは、物事の「新しい切り口」「新しい活用法」を創造する行為のことで、新しいアイデアから、社会的意義のある新たな価値を創造し、社会に変化をもたらす自発的な人・組織・社会の幅広い変革を意味する。つまり、イノベーションとは、それまでの仕組みなどに対して、新しい考え方を取り入れて新たな価値を生み出して社会的な変化を起こすことである。

今回の小中連携教育活動の特徴は、町教育委員会と学校の関係者が事前に研究実践の基本方針案を協議して、全体構想（グランドデザイン）と具体的な実践計画（アクションプラン）を策定したこと、また、それらの全体構想や具体的な実践計画を町内各小中学校の諸計画に反映させると同時に、これまでの研究組織を新たな4部会の組織に再編成して、共通基盤の下、小中連携して共通実践に取り組むことにある。

言い換えれば、今回の小中連携教育活動の実践は、町内の教職員が共通基盤の下、課題解決に向けた小中共通実践に取り組み、常に改善意識を持ち、お互いの知恵を結集した「課題解決への限らない挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）」と言えるものである。

更に今回の小中連携研究実践では、教育委員会と学校が協働して取り組み、働き方改革、組織基盤の強化、

人材の相互育成など、これからの新しい研究実践の在り方を探求するものであり、町内教職員の知恵を結集して、小中連携教育活動の研究実践に協働して取り組むことにより、これまでとは違った新しい研究実践スキームの構築に挑戦するものである。

結びに、本町の小中連携教育活動の研究実践は、まだまだ研究の緒についたばかりであるが、皆様方の忌憚のないご意見やご感想を頂ければ幸いである。

令和4年4月1日

益城町教育長 酒井博範

目 次

1 小中連携研究実践の方向性	1
2 小中連携イノベーションプラン	2
3 夢実現！益城町ドリカムアクションプラン	4
4 益城町教育イノベーション グランドデザイン	5
5 小中連携《 学習指導 》アクションプラン	6
6 小中連携《 英語教育 》アクションプラン	7
7 小中連携《 ICT 教育 》アクションプラン	8
8 小中連携《 コミュニティ・スクール 》アクションプラン	9
9 益城町小中連携研究組織	10
10 小中連携学習指導イノベーションプラン	11
11 小中連携英語指導イノベーションプラン	15
12 小中連携 ICT 教育イノベーションプラン	18
13 小中連携コミュニティ・スクールイノベーションプラン	21

1 小中連携研究実践の方向性

～ 限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

これまで学校現場では、児童生徒の基礎的な知識・技能及び思考力・判断力・表現力等を育成するために、数々の研究実践が行われてきた。ところが、そのような懸命な努力にもかかわらず、児童生徒が学んだ知識技能を生かし課題解決する力は、なかなか向上の兆しが見えず今もなお大きな課題である。

この原因は何かと考察した時、「研究実践への取り組み方」にも大きな一因があると考えた。

これまでの研究実践を振り返った時、主に次の1～5に示す事柄が、課題としてあげられる。

1 研究主題の語彙の定義（「対話的で深い学びとは」など）に多くの時間を費やしてきた。

＊理論研究に偏りがちになり、テーマの具体的な実践研究に結び付いていなかった。

2 研究実践するための研究組織や研究内容についての協議に多くの時間を費やしてきた。

＊研究計画作成に多くの時間を要して、教師間の具体的な研究実践の時間が不足した。

3 研究実践が大研などの授業研究を中心に取組まれ、限られた取組になりがちであった。

＊研究授業に多くの時間が費やされ、個々の教師の資質向上にうまくつながらなかった。

4 研究成果が数値目標に向けられ、具体的な教師や児童生徒の変容の姿等の評価が少なかった。

＊研究実践過程における具体的な教師や児童生徒の変容の姿が評価の中に十分反映されなかった。

5 実践発表後は、その成果を生かした研究実践が組織的に継続・発展できない状況が見られた。

＊研究指定発表後は、研究組織・研究内容が継続されず、研究成果も生かされないことが多かった。

以上のように、これまでの研究実践は、どちらかといえば理論研究が中心となり、現場の教職員が互いに切磋琢磨して課題解決に向かう実践にはなにくく、職員の力量を高め合い、充実感・達成感のあるものには至らなかった現状がある。

そもそも研究実践とは、目の前の課題を解決するために、日々、教師一人一人が試行錯誤して取り組むものであり、教師は、その課題解決力を身に付けるために、日々、研修と修養に励まねばならない。

今回の小中連携研究実践は、これまでの研究実践の反省に基づき、新しい切り口で新たな研究実践の在り方を探求するものである。今回の研究実践の方向性として次の5点を設定する。

1 研究主題は、これまでの実践資料等を踏まえ、現状の課題とあるべき姿を求めて設定する。

2 研究内容・組織等の概要については、新学期に円滑な取組ができるよう事前に協議・設定する。

3 研究実践については、提案された具体的内容について小中連携し日常的に焦点化して取り組む。

4 研究の評価は、研究実践を通じての教師及び児童生徒の変容の姿を具体的に示すよう工夫する。

5 研究発表後においても、研究成果を生かした研究実践が継続できるように工夫改善する。

今回の小中連携研究実践は、課題解決に向けた共通実践を中心に据え、常に改善意識を持って取り組むとともに、教職員全員が知恵を出し、力を合わせて積極的に研究実践に取り組むことを大切にしたい。言い換えれば、共通の実践基盤に立ち、教職員全員の知恵を結集した「課題解決への限らない挑戦」（ETC：Endless Teacher's Challenge）を実践研究の中心に据えて取り組みたい。

また、今回の小中連携研究実践は、教育委員会と学校が協働して取り組み、働き方改革、組織基盤の強化、人材の相互育成など、これからの新しい研究実践の在り方を探求するものであり、町内学校教職員の知恵を結集して、小中連携教育活動の研究実践に取り組み、これまでとは違った研究実践スキームの構築を狙っている。

2 小中連携イノベーションプラン

～ 限らない教師の挑戦（ETC : Endless Teacher's Challenge）～

今回の小中連携研究実践では、その基本的なスタンスとして次の4点を中心に据えて取り組む。

- 1 中学校区の小中学校は、*夢実現！益城町ドリカムアクションプランの4項目を重点事項として、小中連携による共通実践に取り組む。
- 2 小中連携教育活動に取り組むため、教育委員会及び各学校に4部会を設置する。4部会は、教育委員会職員及び教職員によって構成し、協働して小中連携教育活動の共通実践に取り組む。
- 3 各部会は、それぞれの実践目標を協議し共通実践に当たるとともに、適宜、実践結果についての考察を行い、改善策を検討するとともに協働してさらなる研究実践に取り組む。
- 4 各部会の研究評価は、数値目標のみならず、教師や児童生徒の具体的な姿容を評価する。以上の4点をもとに、小中連携研究実践の*全体構想（グランドデザイン）と*具体的な実践計画（アクションプラン）を策定した。（*については別紙参照）

次に、上記の小中連携全体構想と具体的な実践計画を具現化するために、下記の小中連携推進委員会、プロジェクトチーム及び各学校に4部会を設置する。

1 小中連携推進委員会を設置する。

- (1) 委員会は、校長及び教育委員会職員等で構成し、下記の4部会を設置する。
○ 学習指導部会 ○ ICT教育部会 ○ 英語教育部会 ○ C.S.部会
- (2) 委員会は、各部会の実践の方向性・進捗状況・評価改善について協議する。
- (3) 委員会は、プロジェクトチームの指導助言及び支援に当たる。

2 各部会にプロジェクトチーム（PT）を設置する。

- (1) PTチームは、教委・管理職・主幹教諭・教務主任・研究主任・担当者等で構成する。
- (2) PTチームは、各連携プランに基づき具体的で実効性のある実践プランを作成する。
- (3) PTチームは、定期的に会合を開き、進捗状況の評価と具体的実践の工夫改善を協議する。
- (4) PTチームは、学校現場での優れた実践を発掘し、その内容を町内の各学校に普及させる。

3 各学校は小中連携に関する研究体制を構築する。

- (1)「学習指導部会」は、小中連携の中核に位置づけ原則として全教職員参加とする。
* 校内研究を推進するために、研究推進委員会を設けるとともに、低・中・高部会（小）や教科部会（中）等を設け研究体制を整える。
- (2)「英語教育部会」は、小3以上の担任等と中学校英語担当教師で構成する。
* 小学校については、希望者があれば自主的に参加することができる。
- (3)「ICT教育部会」「C.S.部会」は、管理職・各担当者・学年代表等で構成する。
* 部会のとりまとめは、教頭・主幹教諭・教務主任等が行う。
- (4) 各部会は、プロジェクトチームが作成した連携プランを学校化して日常の実践に取り組む。
- (5) 各部会は、必要に応じて会合を開き、具体的実践の評価と工夫改善を協議する。

«研究実践における4部会の位置づけ»

小中連携の中核を「学習指導部会」に位置づけ、「英語教育部会」「ICT 教育部会」「C.S.部会」は、「学習指導部会」の活動を効果的に機能させる部会として位置づける。

4 小中連携の取組成果の共有化や情報公開に取り組む。

- (1) 優れた実践は、町のクラウド等で情報の共有化を図り、日々の教育活動で積極的に活用する。
- (2) 優れた実践は、広報ましき・ホームページ・益城の学び等の広報手段で紹介する。

5 小中連携の実践で、優れた功績をあげた教職員を表彰する。

- (1) プロジェクトチームは、日常の教育活動における優れた実践を推進委員会へ推薦する。
- (2) 推進委員会は、推薦された取組について協議し、その中から優秀実践者を選定する。
- (3) 選定された優秀実践者には、教育委員会から賞状及び図書券を贈呈する。

3 夢実現！益城町ドリカムアクションプラン

～チャンス（chance）チャレンジ（challenge）チェンジ（change）～

1 人権を尊重し、地域とともに創るコミュニティ・スクールの推進（学校に行くのが楽しみ！）

- （１）人権を尊重し、一人一人の個性を伸ばす教育（児童生徒に愛情を持って接する先生）
- （２）自分を大切に、相手を大切にする教育（自尊感情があり、思いやりのある児童生徒）
- （３）地域と協働して郷土愛を育み、未来を創造する教育（保護者・地域とともに前進する学校）

2 タブレットを活用したアクティブ ICT 教育の推進（タブレットを使うのが楽しみ！）

- （１）思考力・判断力・表現力を育む ICT 教育（自分の考えを、自分の言葉で、表現する力の育成）
- （２）興味関心を喚起し、探究活動を支援する ICT 教育（調べることが大好きな児童生徒の育成）
- （３）お互いの資質を高め、磨き合う ICT 教育（発見を分かち合い、実力を高め合う雰囲気醸成）

3 楽しく、魅力的で、夢のある英語教育の推進（英語の授業が楽しみ！）

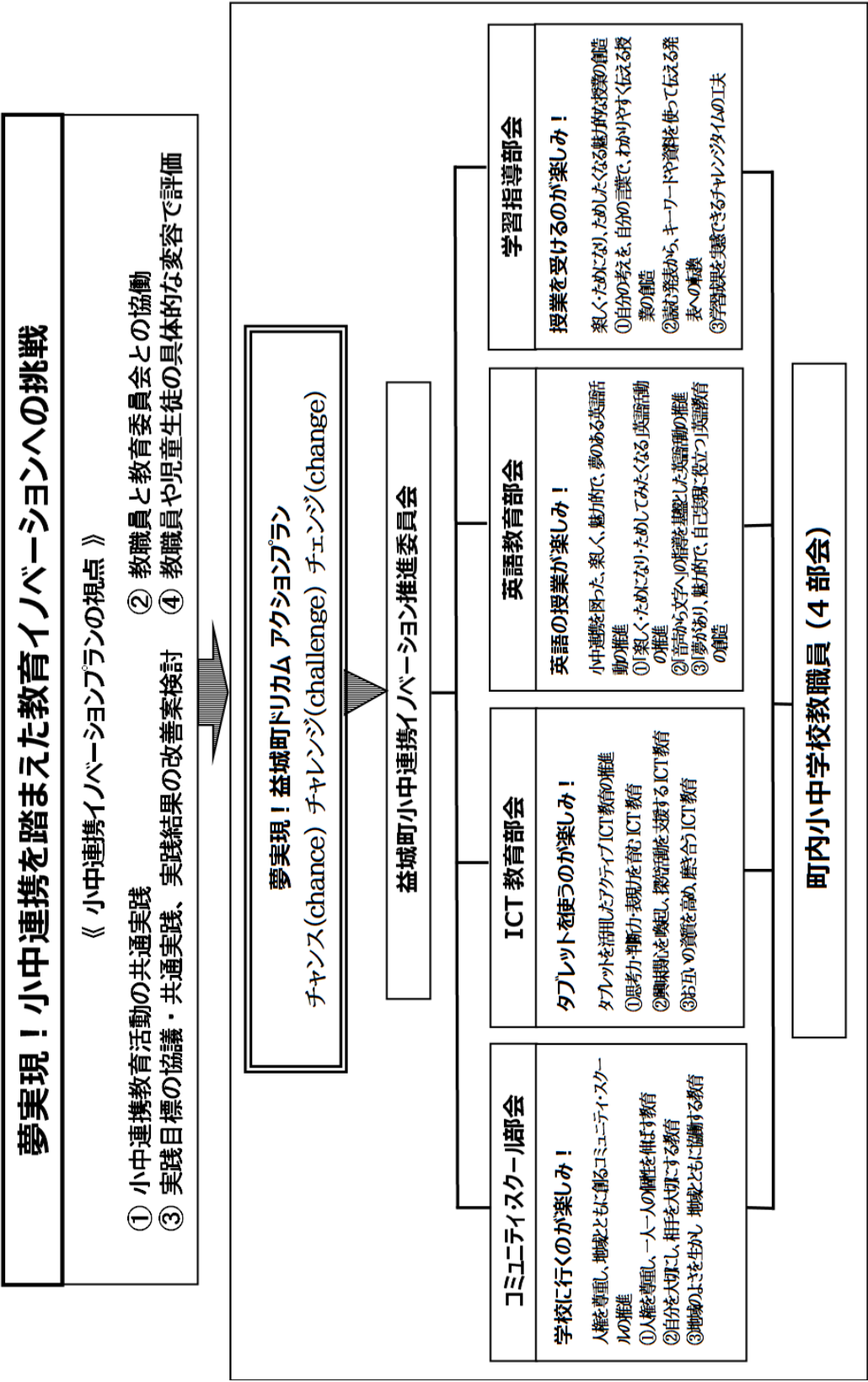
- （１）「楽しく・ためになり・ためしてみたいくなる」英語活動の推進（音声を中心に据えた活動）
- （２）「音声から文字へ」の指導を基盤とした英語教育の推進（小中一貫した英語指導体制の確立）
- （３）「夢があり、魅力的で、自己実現に役立つ」英語教育の創造（グローバル社会での活躍）

4 楽しく・ためになり・ためしてみたいくなる魅力的な授業の創造（授業を受けるのが楽しみ！）

- （１）自分の考えを、自分の言葉で、わかりやすく伝える授業の創造（児童生徒が主役の授業）
- （２）読む発表から、キーワードや資料を使って伝える発表への転換（セルフトークの実践）
- （３）学習成果を実感できるチャレンジタイムの工夫（家庭学習につながる学習意欲の喚起）

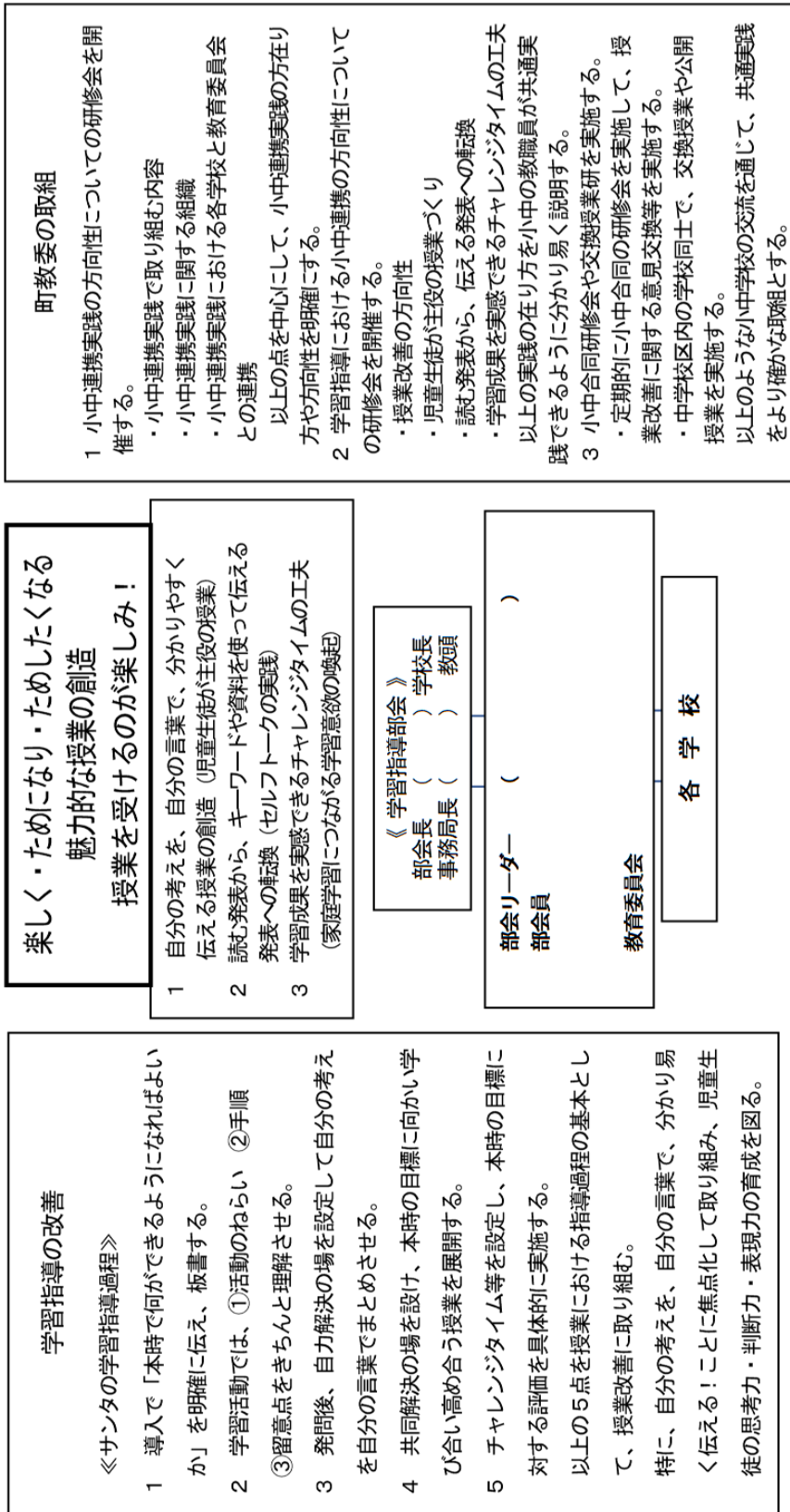
Dream it! Believe it! Achieve it! （夢見よう！ 信じよう！ やり遂げよう！）

4 益城町教育イノベーション グランドデザイン



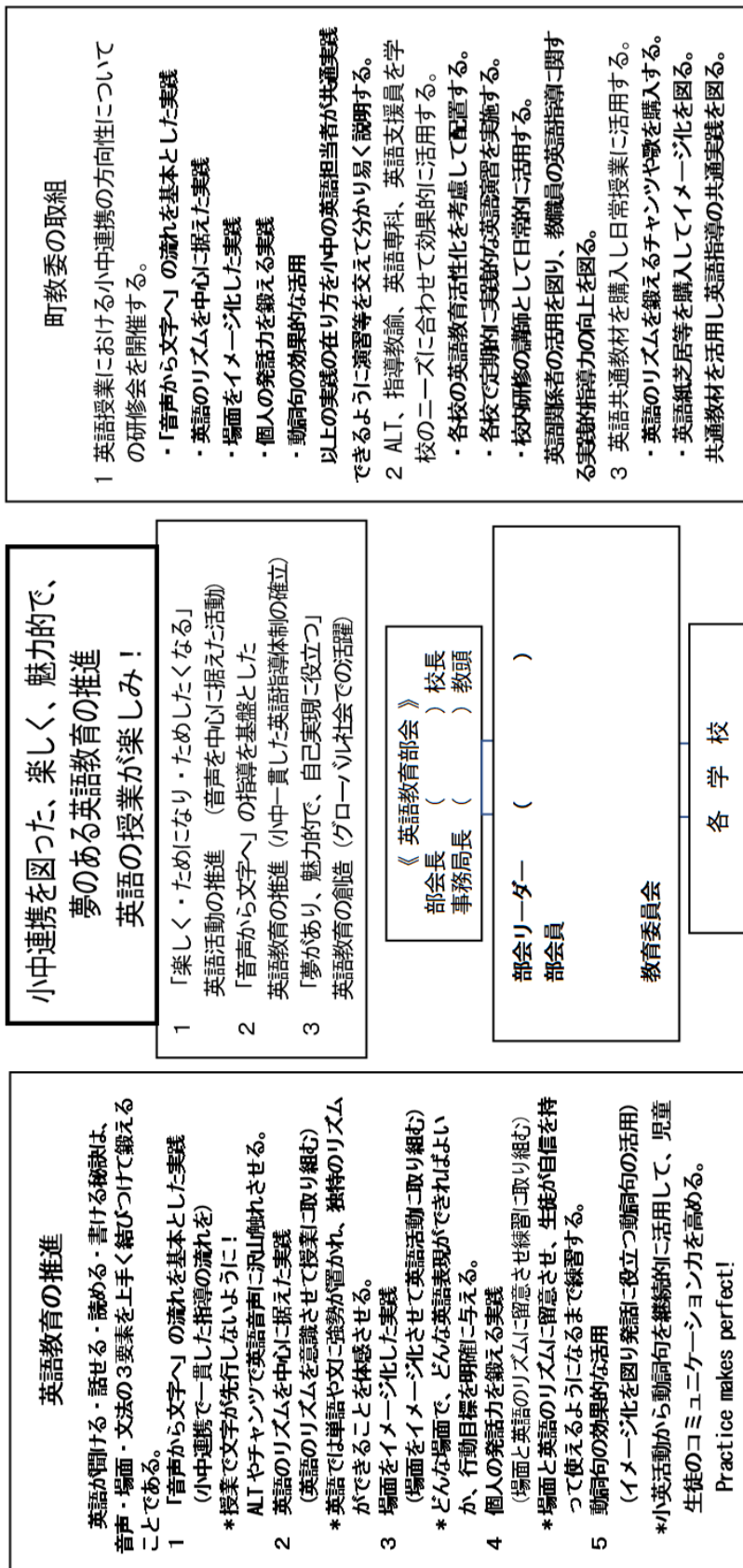
5 小中連携《 学習指導 》アクションプラン

チャンス(chance) チャレンジ(challenge) チェンジ(change)



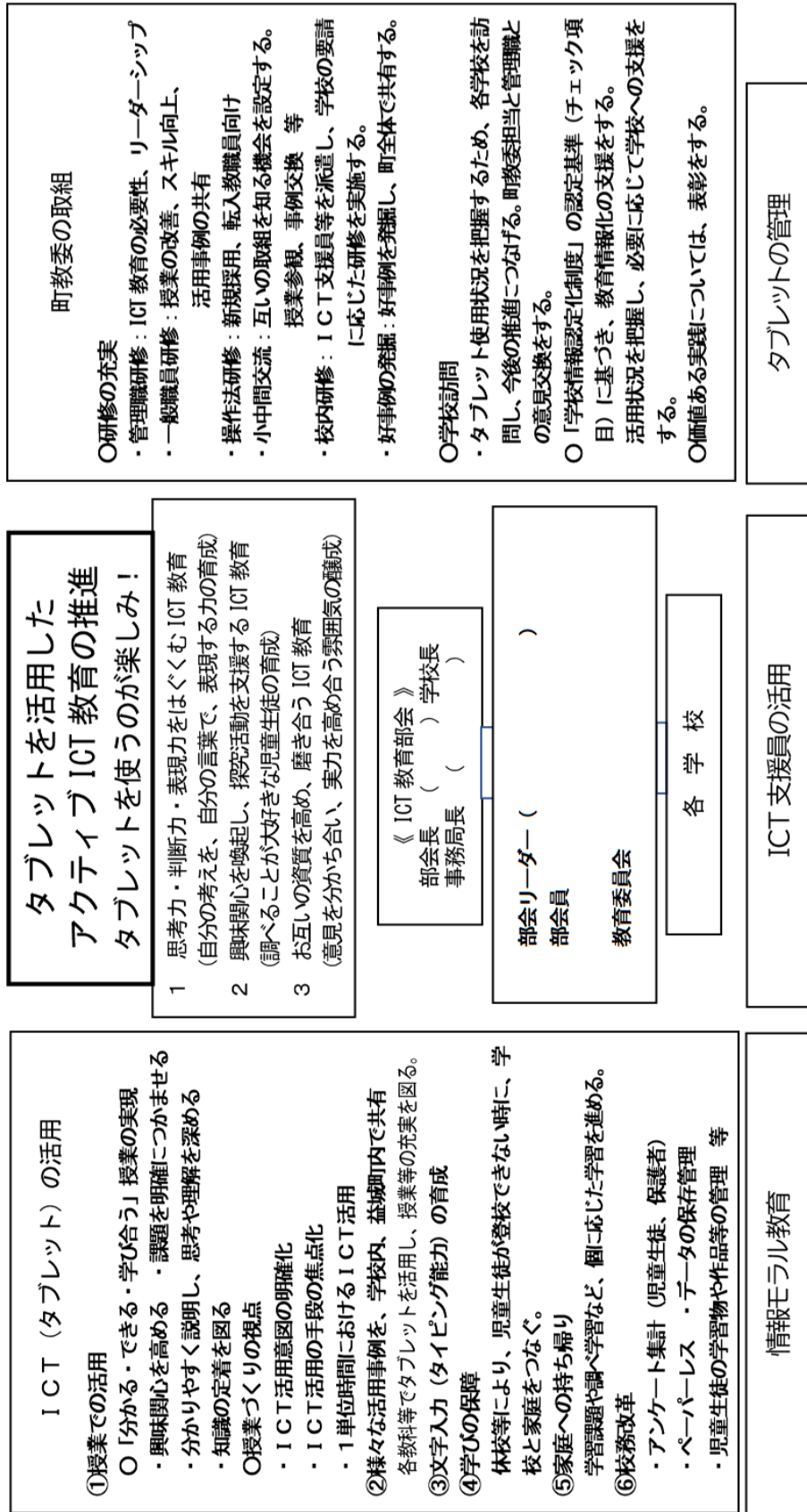
6 小中連携《 英語教育 》アクションプラン

チャンス(chance) チャレンジ(challenge) チェンジ(change)



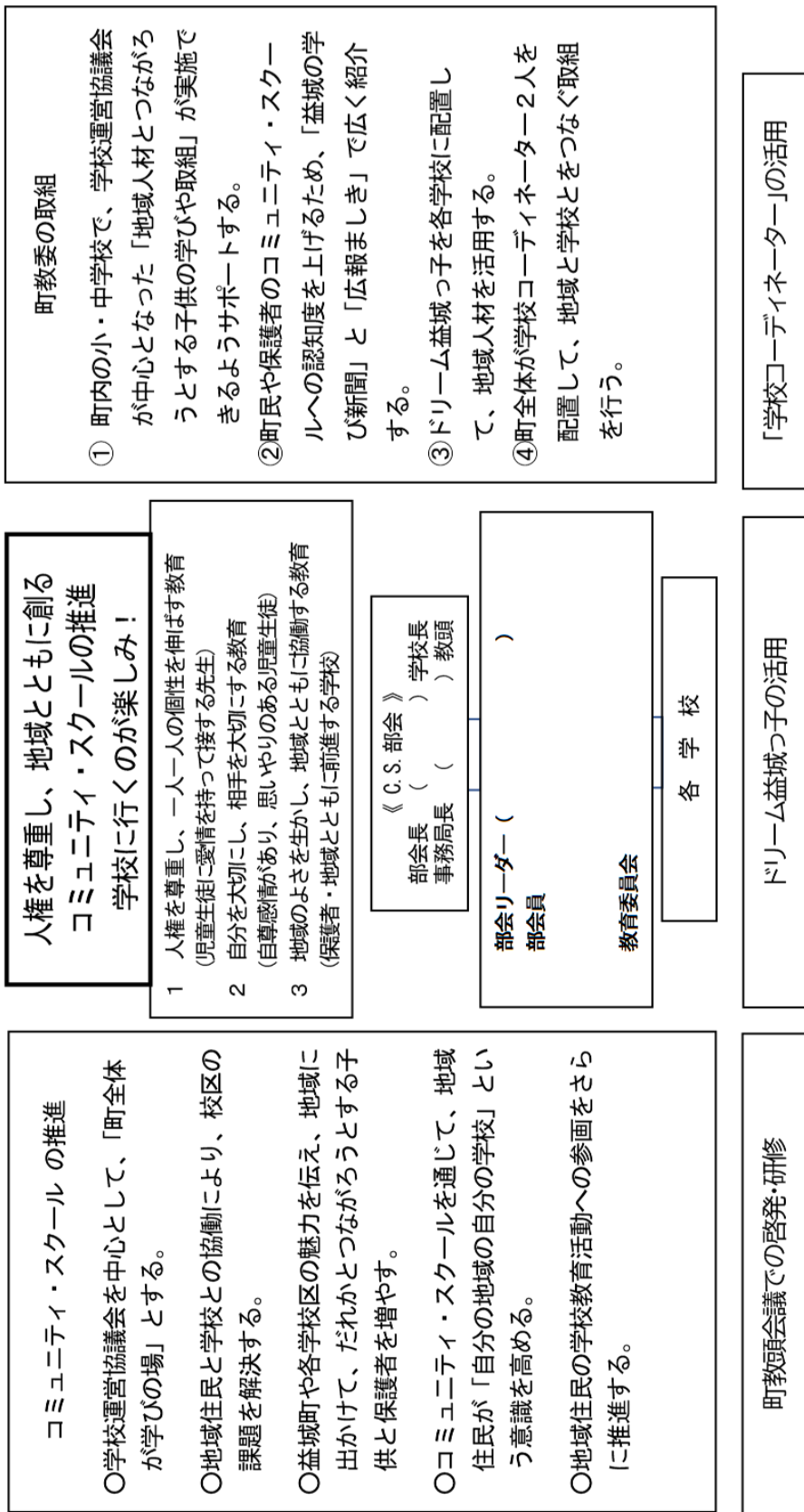
7 小中連携《 ICT 教育 》アクションプラン

チャンス(chance) チャレンジ(challenge) チェンジ(change)



8 小中連携《コミュニティ・スクール》アクションプラン

チャンス(chance) チャレンジ(challenge) チェンジ(change)



9 益城町小中連携研究組織

小中連携推進委員会		
委員長	副委員長	事務局担当
学習指導部会	(	)
ICT教育部会	(	)
英語教育部会	(	)
C.S.部会	(	)

プロジェクトチーム

学習指導部会	ICT教育部会	英語教育部会	C. S. 部会
部会長	部会長	部会長	部会長
副部会長	副部会長		副部会長
事務局	事務局	事務局	事務局
部会員	部会員	部会員	部会員

部会員 ◎プロジェクトリーダー ○サブリーダー

10 小中連携学習指導イノベーションプラン

～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

1 小中連携した授業改善のアイデア ～主体的な学びへの転換

児童生徒の主体的な学びへの転換を図るに、以下の(1)～(5)を、小中学校の教師が授業において共有実践を図る具体的取組事項として提案したい。

（１）単元や各授業における目標のイメージ化を図り、行動目標を設定する。

＊単元を通してのゴールや授業のゴールを行動目標化して明確にする。

（２）児童生徒が「自分の考えを、自分の言葉で、分かり易く伝える力」を鍛える。

＊個々の児童生徒が、持っている力を駆使して「自分の考えを伝えようとする力」を育む。

（３）書いたものを読む発表から、自分の考えを伝える発表への転換を図る。

＊読む発表から、相手意識を持ち資料等を活用して、分かり易く伝える発表への転換を図る。

（４）自分の考えを相手に分かり易く伝えるためにセルフトーク（個人練習）の時間を設定する。

＊発表前に、発表に使うキーワードや資料を使ったセルフトークの時間を設定する。

（５）行動目標に対する個々の学習成果を確かめるためにチャレンジタイムの時間を設定する。

＊行動目標に関する問題等に挑戦させることで、自らの学習成果について自己評価させる。

以上の(1)～(5)を、小中学校の教師が、日々の授業で共通実践することにより、児童生徒に基礎的な知識及び技能を習得させ、課題解決に必要な思考力、判断力、表現力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養うことが可能になる。

2 「楽しく、ためになり、ためしてみたい（サンタの）授業」への挑戦

ここでは、児童生徒の主体的な学びへの転換を図るために、小中連携による「楽しく、ためになり、ためしてみたい（サンタの）授業」への挑戦について提案する。

小中連携教育活動の一環として、「サンタの学習指導過程」を設定して、共通実践を図りたい。

なお、各学校の学習指導過程は、この「サンタの学習指導過程」に適切に織り込むものとする。

「サンタの学習過程」については、以下に示すとおりである。

« サンタの学習指導過程 »

《 自分の考えを 自分の言葉で 分かりやすく説明する！ 》

- 1 導入で「本時で何ができるようになればよいか」を明確に伝え、板書する。
- 2 学習活動では、①活動のねらい ②手順 ③留意点をきちんと理解させる。
- 3 発問後、自力解決の場を必ず設定して、自分の考えを自分の言葉でまとめさせる。
- 4 共同解決の場を設け、本時の目標に向かって学び合い高め合う授業を展開する。
- 5 チャレンジタイム等を設定して、本時の目標に対する評価を具体的に実施する。

3 <<サンの学習指導過程>>授業実践上のポイント

前に設定した基本的な<<サンの学習指導過程>>を中心に据えて、さらに魅力的で分かり易い授業にするために、次の<<授業実践上のポイント 10>>を念頭に置き、日々の授業実践に取り組む。

<<授業実践上のポイント 10>>

授業は、教師が「教えたいこと」を児童生徒が「学びたい」と思った時、初めて成立する。

1 本時の目標：「～ができる。」学習が、具体的に評価できる「行動目標」を設定する。

*「～を考えている。」抽象的な目標ではなく、「～できる。」具体的な行動目標を設定する。

2 導入：「日常生活」に関連させ、「何ができるようになればよいか」理解させる。

* 学習が「何に役に立つ」か、「何ができるようになればよいか！」をきちんと理解させる。

3 学習活動：「活動のねらい・活動の手順・活動上の留意点」を明確に伝える。

*「活動のねらい」「活動の手順」「活動上の留意点」を明確に伝え、スムーズな学習活動へつなぐ。

4 思考力・判断力：課題解決に向け、情報を収集・活用し「自分の考え」を持たせる。

*「文字」のみではなく資料から情報を読み取り、内容をイメージ化する練習で思考力を育む。

5 表現力：「自分の考え」を「自分の言葉」で、資料やキーワードを使ってまとめる力を育む。

*「どうしたら、自分の考えが分かり易く伝わるか」をしっかりと考え工夫させる。

6 セルフトーク：相手意識を持ち、「分かり易く」伝える為の「実践練習」をさせる。

* 個々の児童生徒に、資料やキーワードを使い分かり易く発表する「模擬練習」に取り組ませる。

7 発表：「キーワードや資料等」を活用して、「相手意識」を持った発表を行わせる。

* プリント等を「読むこと」から、「自分の考えを相手に伝えること」への転換を図る！

8 練り上げ：個々の考えを「本時の目標」に向かって、学び合い高め合わせる。

* 学習の練り上げが、常に「本時の目標」に向かって行われているか、チェックをする。

9 チャレンジタイム：「本時の学習が身に付いたか」練習問題等に楽しく「挑戦」させる。

* ICT 等も活用しながら、楽しくチャレンジできるような練習問題を工夫する。

10 まとめ：「キーワード」等を活用して、本時の目標に沿った「まとめ」をする。

* 児童生徒の発表等も大切にしながら、「キーワード」を使って本時のまとめをする。

評価 A：「本時の目標が達成できたかどうか」児童生徒自身に「自己評価」を行わせる。

* 児童生徒が本時の目標に対して、自身の到達度が実感できるような評価を実施する。

評価 B：教師は、「チャレンジタイム」や「自己評価」を見て「指導に対する評価」を行う。

* 教師は、児童生徒の本時の目標に対する到達度を見取りや資料等を活用して客観的に評価する。

真の学習成果とは、授業が終了した時点で、一人一人の児童生徒が「授業の学びについて、自分の言葉でどれだけ説明できるか！」つまり「授業で分かったことは何か、何ができるようになったか！」を自分言葉で誰かに伝えることができることである。

«「サンタの授業」実践上の事前準備チェックリスト»

前述した「サンタの授業」実践に臨む時、事前準備として次の点をチェックしておきたい。

チェック1：授業に「授業に必要な基礎・基本」がどれだけ身に付いているか。

＊「児童生徒の実態チェックと事前の補強」が授業の土台となる。

チェック2：「目標—中心的学习活動—まとめ—評価」に整合性があるか。

＊指導過程におけるこの4点の整合性をチェックし、必要に応じて修正する。

チェック3：「授業における児童生徒の思考の流れ」がスムーズであるか。

＊教える側からではなく、学ぶ側から思考の流れをシミュレーションする。

チェック4：指導過程を頭に入れ、児童生徒を見て授業を展開できるか。

＊事前のリハーサルで学習の流れを掴み、発問・板書計画も確認する。

チェック5：「表情・声の抑揚」、「絵・グラフ等の活用」、「話しの筋道」は考慮されているか。

4 実践的な授業づくりへの挑戦 ～板書型学習指導案の活用～

板書型学習指導案は、そもそも日常授業での活用を想定したものであるが、日常授業の延長として、併せて、研究授業学習構想案における本時の展開部分での活用を図ることも提案する。

以下に、具体的な«研究授業における学習構想案の様式»の概要について提案する。

«研究授業における学習構想案の様式»

(1) 単元構想

単元を通した課題（単元の中心的な学習課題）				
指導計画と評価計画				
	1次	2次	3次	4次
指 計				
評 計				

(2) 単元における系統および児童の実態

単元における系統
児童の実態

(3) 授業実践上のポイント（授業実践上のポイント10の活用：授業の中核となるアイデア）

例 ○自分の考えを自分の言葉で分かり易く表現し、セルフトークに重点を置いた展開を図る。

○文章を読む発表ではなく、「キーワードや資料等」を活用した分かり易い発表を行わせる。

(4) 板書型学習指導案（本時の展開）《日常の授業においてはこの様式を使用する》

本時の目標：

学習活動の流れ			
(1)	(2)	(3)	(4)
学習過程における主な発問			
(1)	(2)	(3)	(4)
板書案			

5 学習定着を図る継続的な学習支援策

児童生徒の学力を定着させるためには、授業改善と同時に、学力定着を図るための学習支援策が必要である。次に、児童生徒の学力定着を図るために小中連携による4つ学習支援策について提案したい。

(1) 児童生徒が学んだことを継続的に挑戦できる場の設定

＊継続的な練習プリント、ドリルパーク（タブレット）、漢字・計算ドリル、学習掲示物など

(2) 児童生徒が学んだことを継続的に自己練習できる場の工夫

＊学習掲示物の工夫、個人用練習プリントの工夫、タブレットを活用した練習の工夫など

(3) 児童生徒の自己練習の成果を見取り・励ます場の設定

＊努力に対する励ましの声掛け、できるようになったことへの称賛、次の目標への指導助言など

(4) 児童生徒の中で、成果を上げた事例や工夫された学習方法の事例等を紹介する場の設定

＊努力の成果が出た事例、自己練習を工夫している事例、上手なタブレット活用事例など

授業後において、以上のような学習支援策に小中連携して取り組むことにより、学習意欲を喚起するとともに、児童生徒の学力定着・向上を図りたい。

6 おわりに

今回の益城町中学校区「学力向上」研究実践が、小中連携教育活動の在り方に新しい展望を開き、今後の小中連携教育活動のさらなる創造に向けた **chance（機会）** として、果敢に **challenge（挑戦）** するヒントになり、小中連携教育活動がさらに **change（進化）** することを心より期待する。

11 小中連携英語指導イノベーションプラン

～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

1 小中連携した音声重視のトピック（題材）導入

英語の学習において、トピック（題材）の導入を教師主導の説明に終始すれば、児童生徒にコミュニケーション力の育成は期待できない。一方、英語の音声面の特徴に留意させながら、児童生徒に自然な英語を何回も聞かせ、英文や単語、更には内容を guess（推測）させる実践を重ねれば、児童生徒のコミュニケーション力育成は大いに期待できる。

そこで、小中学校の共通実践として、音声を重視したトピック（題材）の導入について提案する。

まず、リスニング練習を行う前に、児童生徒に対して、次のような聞き取りのポイントを説明する。

- (1) リスニングのときは、すべての単語を聞き取ろうとせず、ストレスの置かれるキーワード等に焦点化して聞き取ること。
- (2) 聞き取れた単語を基に、今日の話の内容について推測すること。

次に、児童生徒に対して、リスニングの手順について具体的に説明する。

《 リスニングの手順 》

- ① 音声を自由に聞いて、キーワード等を含めた英語音声を聞き取る練習をする。
- ② 次に「何を聞き取るか」明確な課題（タスク）を知って聞き取る。
 - ・はじめの聞き取りでは、話の大まかな内容をつかむことに心掛ける。
 - ・2回目からは、少しずつ詳細な内容について焦点化し、聞き取る。
- ③ 聞き取った内容をお互いに発表しあって共有する。
- ④ 聞き取った単語等から本時のトピック（話題）を推測する。
- ⑤ 必要に応じて、ピクチャーカードや写真等の視覚教材を見て聞き取る。

この方法におけるリスニングのねらいは、児童生徒に聞き取りのポイントを変えながら、何回も英語を聞くチャンスを与え、自然に「英語の音」に慣れさせることと、聞き取れた単語や文等を活用して、何とかトピック（話題）をつかもうとする技能や態度を育成することである。

この実践に小中連携して取り組むことにより、児童生徒は試行錯誤を繰り返しながら、英語のリスニングに挑戦するとともに、自然に英語のリズムに親しむ機会を得ることになる。このリスニングの訓練が、後の話すこと・読むこと・書くことの技能習得にもつながり、児童生徒の英語のコミュニケーション能力育成においても大いに有効であると考えられる。

2 小中連携した英語学習の具体的戦略

ここでは、1 小中連携したトピック（題材）の導入を踏まえ、児童生徒の実践的な英語力を育成するために、小中連携した英語学習の具体的戦略について、以下の(1)～(5)を、小中連携における共有・実践すべき具体的戦略として提案する。

≪小中連携した英語学習の具体的戦略≫

(1) 「音声から文字へ」の流れを基本とした実践（小中連携で一貫した指導の流れを）

- ① 小学校では、Visual Aids（絵カード・写真）と音声を中心に英語活動を実施する。
 - ② 小学校の音声指導では、チャンツ等を活用し、英語のリズムに慣れさせる。
 - ③ 中学校においても、Visual Aids と音声で学習した後、文字につなげて指導する。
- * 授業で文字が先行しないように！ ALT やチャンツで英語音声に沢山触れさせる！

(2) 英語のリズムを中心に据えた実践（英語のリズムを意識させて授業に取り組む）

- ① 英語と日本語のリズムの違いを意識させ、リスニングやスピーキングに生かす。
 - ② 英語特有の発音・リズム等（音声のポイント）を練習する時間を必ず位置づける。
 - ③ 発話の練習（個別やペアワーク等）では、英語のリズムを意識して取り組ませる。
- * 英語では単語や文に強勢が置かれ、独特のリズムができることを体感させる！

(3) 場面をイメージ化した実践（場面をイメージ化させて英語活動に取り組む）

- ① 英語をどんな場面で、どのように使用するか、具体的なイメージ化を図る。
 - ② 発話の練習では、実際の場面を想定して英語活動に取り組ませる。
 - ③ キーワードと資料等を有効に使って、何とか相手に伝えようとする態度を育てる。
- * どんな場面で、どんな英語表現ができればよいか、行動目標を明確に与える！

(4) 個人の発話力を鍛える実践（場面と英語のリズムに留意させ練習に取り組む）

- ① モデルを聞きながら、一斉練習をする。
 - ② 各人で言える部分と、言えない部分をチェックする。
 - ③ 特に言えない部分に注意して、再度モデルを聞きながら、一斉練習をする。
 - ④ 再度、各人で言えるかどうかをチェックする。
 - ⑤ ペアやグループで楽しく練習する。（一人が日本語で言って、一人が英語に直す等）
 - ⑥ まとめとしての一斉練習をする。
- * 場面と英語のリズムに留意させ、生徒が自信を持って使えるようになるまで練習する！

(5) 動詞句の効果的な活用（イメージ化を図り、実際の発話に役立つ動詞句の活用）

日常の英語活動において、動詞句を最大限に活用する。

- ① 動詞句ピクチャーカード、体操、プリントを作成し、日常的な活用を図る。
 - ② 作成した動詞句関連グッズをフルに活用し、自然に発話できるように練習する。
 - ③ 学習シートにも動詞句の絵等をのせ、分かりやすく楽しいシートを作成し活用する。
- * 小英活動から動詞句を継続的に活用して、児童生徒のコミュニケーション力を高める。

小中連携によるこの具体的戦略への取組により、児童生徒の実践的な英語力が育成され则认为る。

3 小中連携した英語授業の進め方

ここでは、2 小中連携した英語学習の具体的戦略を踏まえ、小中学校の英語指導者が、連携して共有・実践すべき英語授業の進め方について提案する。

原則として、小中学校の英語授業は、(1)～(11)「音声から文字へ」の指導過程で実施する。

ただし、文字に関係する内容については、小学校英語科及び中学校英語科にて取り扱うこととする。

≪小中連携した英語授業の進め方：「音声から文字へ」の指導過程≫

(1) 授業の始まりに、英語の歌やチャンツ、基本文や対話文の練習など継続的に実施する。

＊個人練習、ペア練習等で、前時の学習を思い起こすような活動をさせる。

(2) Warm-up では、本時の展開で使う英語表現や単語をゲーム等で楽しく練習させる。

(3) 新しい表現の導入では、身近な生活場面を設定して児童生徒の興味・関心等を喚起する。

また、実際の使用場面をイメージ化できるようにロールプレイや視聴覚資料等を工夫する。

(4) 導入の聞く活動では、アクティブリスニングを実施して、タスクを与えてキーワードを聞き取らせたり、ピクチャーカードを利用してトピックを推測させたりする練習をさせる。

(5) 英語表現や単語練習では、英語のリズムに留意させるとともに、文化的な情報等も併せて知らせ、楽しく興味を持ちながら、自信を持って言えるように工夫して取り組む。

(6) 英語表現の練習では、絵・イラスト・学習シート等を活用して、実際のコミュニケーション場面を想定させながら、個人練習やペア練習に繰り返し取り組ませる。

(7) 個人練習では英語のリズムに注意し、自信を持って言えるようになるまで練習に取り組ませる。

また、Read & Look up や shadowing を徹底して、文字を見て発話することからの脱却を図る。

(8) ペア練習等では、個人練習した表現を使い、キーワードやジェスチャー等を活用しながら、相手を見て何とか伝えようとする実践的な練習をさせる。

(9) 本時で練習した英語表現を、確実に書けるように、声に出して何回も練習させる。

(10) 最後に、音声のみを聞かせ、始業時と比べてどれだけ英語表現が聞きとれるかに挑戦させる。

(11) 指導者自身が、「本時の目標：評価基準」に即して、本時の授業評価をする。

児童生徒も、「本時の目標：評価基準（児童生徒用）」に即して評価させる。

4 終わりに

これからのグローバル社会において、児童生徒は英語をコミュニケーションの手段として使いこなせるようにならねばならない。そのためにも、これまで以上に、小学校外国語活動・英語科と中学校英語科の授業連携を効果的に図り、児童生徒の英語のコミュニケーション力を育むことが求められる。

結びに、この「小中連携した英語教育イノベーションプラン」が、効果的な小中連携の英語教育の連携に一石を投げるとともに、Learning English is a lot of fun! と実感できるような小中連携した英語授業の創造に向かって、一つの **chance（機会）** として、果敢に **challenge（挑戦）** するヒントになり、小中における英語教育が **change（進化）** していくことを心から期待するものである。

A small step makes a big difference.

The biggest challenge is in yourself!

Dream it! Believe it! Achieve it!

12 小中連携 ICT 教育イノベーションプラン

～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

1 はじめに

学習指導要領（平成29年告示）では、学習の基盤となる資質・能力の一つに初めて「情報活用能力」を学習の基盤となる資質・能力と位置付け、各教科における ICT を活用した学習活動の一層の充実が求められている。また、「GIGA スクール構想」への対応により、益城町においては令和2年12月に1人1台端末と高速大容量通信ネットワーク（LTE 通信）が整備された。各学校では、ICT を積極的に活用した授業改善に向け取り組んでいるところである。

しかし、ICT の活用はあくまでも授業改善の一手段であり、ICT を活用することが目的にならないようにしなければならない。そのためにも、ICT 活用のねらいを明確に持ち児童生徒の思考を促し、ICT 活用の良さが実感されるものにしていかなければならないと考える。

本研究が、ICT を活用した授業の広がりとなり、「分かる・できる・学び合う」授業となるように取り組んでいきたい。

2 ICT 教育における小中連携の課題

- （1）GIGA スクール構想により早急に教育情報化が進んだことから、各学校に教育情報化を図る推進体制が十分に組織されないまま進められた。
- （2）日常的な授業において情報活用能力を育成することが必要であるが、一斉に導入されたため各学年で身に付けるべき情報活用能力が、不十分であった。また、情報モラルについては、小学校からの積み上げが少なく、モラルの十分な育成前にタブレット端末が貸与されている。
- （3）教員の ICT 活用スキルの格差や ICT を活用した授業の実施状況等は、学校間、教員間で差が見られる。また、小学校と中学校では、教員や生徒に習熟の差が見られ、活用の面でも小学校は比較的多く活用されているが、中学校では十分に活用されていない状況である。

3 小中連携で目指す ICT 教育

タブレットを活用したアクティブ ICT 教育の推進（タブレットを使うのが楽しみ！）

- （1）思考力・判断力・表現力を育む ICT 教育
（自分の考えを、自分の言葉で、表現する力の育成）
- （2）興味関心を喚起し、探究活動を支援する ICT 教育
（調べることが大好きな児童生徒の育成）
- （3）お互いの資質を高め、磨き合う ICT 教育
（発見を分かち合い、実力を高め合う雰囲気醸成）

4 小中連携した ICT 教育における共通実践内容

(1) ICT を活用した授業づくり

ア 「今までの授業に ICT をどう取り入れるか」ではなく、「ICT を活用した授業はどのような授業か」という視点で授業づくりをする。

※ICT を活用した授業

- 興味関心を高める ○課題を明確につかませる
- 分かりやすく説明したり、児童生徒の思考や理解を深めたりする ○知識の定着を図る

イ ICT を活用し、「分かる・できる・学び合う」授業を実現する。

児童生徒の学習への興味関心を高め、分かりやすい授業や「主体的・対話的で深い学び」を実現する。

- ・映像等を組み合わせた説明
- ・映像やグラフ等の拡大提示、各種ソフト等の活用による分かりやすい説明
- ・映像を見たり、児童生徒のノートを拡大したりしながらの話し合い活動

ウ ICT を活用し、思考力・判断力・表現力を育成する。

- ・ICT による全員参加型（学び合う）学習スタイルの構築
- ・授業づくりの視点

① ICT 活用の意図の明確化

ICT を「何のために」「どのように」「いつ」活用すると効果的かを明確にする。

② ICT 活用の手段の焦点化

教科・単元の特性、児童生徒の実態から、思考等を促すために効果的と思われる ICT 活用の手段を焦点化する。

③ 1 単位時間における効果的な ICT 活用

ICT 活用の「ねらい」「手段」「場面」を板書型学習指導案に明記し、思考等を促すために意図的・計画的な ICT 活用を考える。

※ICT を活用した授業づくり：文部科学省が提示した分類例を参考

① 一斉学習（一斉指導による学び）

教師による教材の提示、電子黒板等を用いた分かりやすい課題の提示等

② 個別学習（児童生徒一人一人の能力や特性に応じた学び）

個に応じた学習：一人一人の習熟の程度に応じた学習

調査活動：インターネット等による調査

思考を深める学習：シンキングツール等を用いた考えを深める学習

表現・制作：タブレット端末の持ち帰りによる家庭学習

③ 協働学習（児童生徒同士が教え合い学び合う協働的な学び）

発表や話し合い：考えや作品を提示・交換しての発表や話し合い

協働での意見整理：複数の意見や考えを議論して整理

協働制作：グループでの分担や協力による作品の制作

学校の壁を越えた学習：遠隔地の学校等との交流

(2) 授業の効率化

授業に費やす時間を確保するために ICT を活用して効率的に進める。

- ・アンケート集計
- ・データの保存管理
- ・児童生徒の提出物や作品等の管理

・ペーパーレス ・教材や教具の映像化 等

5 おわりに

ICT 環境が整備され、益城町のほとんどの教師がタブレット端末を抵抗なく使えるようになった。また、各学校では ICT 教育に堪能な教師を中心とした授業改善が広がりを見せている。

これからは、さらに ICT を効果的に活用し、「分かる・できる・学び合う」授業を行うための授業改善に向けて研究を進めていく。授業実践では「ICT を活用することが目的ではない」ということを念頭に置きながら、本研究が目指す ICT 教育に向け、その具現化を図っていきたい。

13 小中連携コミュニティ・スクールイノベーションプラン

～限らない教師の挑戦（ETC：Endless Teacher's Challenge）～

1 小中連携した「町全体が学びの場へ」のアイデア ～地域とともにある学校への転換

学校運営協議会を中心とした、地域とともにある学校への転換を図るために、以下の(1)～(5)を、小中学校の管理職と担当が「町全体が学びの場へ」の共有実践を図る具体的取組事項として提案したい。

- (1) 「町全体が学びの場へ」のイメージを、7つの学校で共通理解する。
* 学校と地域住民が協働してつくりあげる学校の姿を明確にする。
- (2) 学校運営協議会委員が、地域の課題を解決するために学校と一緒に活動することを明確にする。
* 個々の委員が地域でのつながりを駆使して、学校教育課題の解決に向け具体的に協働する。
- (3) 学校運営協議会を課題解決に向け、能動的で実践的に活動する組織へと転換を図る。
* 学校からの情報提供だけでなく、地域へ働きかける主体的な学校運営協議会への転換を図る。
- (4) 各学校間や地域住民に対して、「町全体が学びの場へ」の取組事例を紹介する。
* 町広報紙等を活用して、町内各学校での取組を広く町民へ紹介する。
- (5) ゲストティーチャーの活用により、地域の人材を広く活用し児童生徒の郷土愛を育む。
* 小中学生が、益城町在住の方々から学ぶことで、郷土愛を育み地域に誇りを持たせる。

以上の(1)～(5)を、日々の小中学校の教育活動で共通実践することにより、児童生徒に対して、益城町の素晴らしさを実感させ、地域の人々に学ぼうとする態度を育む。

2 「学校に行くのが楽しみ！」という教育環境づくり

ここでは、地域とともにある学校への転換を図るために、小中連携による「学校に行くのが楽しみ！」と、子どもたちや地域の方々に実感してもらえる教育環境づくりについて提案する。

- (1) 小中連携教育活動の一環として、「町全体が学びの場へ」を共通のキーワードとして取り組む。
- (2) 町教育委員会は、各学校運営協議会の主体性を尊重するとともに、各学校の課題解決につながる協議会の独自のアイデアと活動計画が実現できるよう支援する。
- (3) 令和3年の2月時点での町内各学校での取組については別紙のとおりである。（別紙参照）
さらなる今後の取組で、「学校に行くのが楽しみ！」と感じる児童生徒や地域住民を増やし、「町全体が学びの場へ」の実現に取り組む。

3 おわりに

今回の益城町でのコミュニティ・スクールの実践が、小中連携教育活動の在り方に新しい展望を開き、今後の地域とともにある学校づくりに向けた **chance（機会）** として、果敢に **challenge（挑戦）** するヒントになり、コミュニティ・スクールの実践がさらに **change（進化）** することを心より期待する。

まち全体が学びの場になるように各学校では…

広安西小学校

全校児童数720人

昔ながらの伝統を伝えていく 持っている技術を伝えていく

広安西小では、「歴史にあふれる美しい川の流域」をテーマに、あいざつ運動にとどまらず、地域の人がボランティアでミシンの使い方や花の苗植えなどを教えています。

また、地域の中心の「昔遊びの達人」を講師として招き、竹馬、びんごま、けん玉、竹とんぼの遊び方を教えてもらったり、門前作りの達人と老人会、PTAの協力により地域に誇る三戸和紙作りを行うなど、地域の場を広げるとともに、日本の昔ながらの伝統を後世に伝えていくための取り組みも行っています。

こうした地域の大人たちと交流を深めることにより、児童たちはふるさとへの愛着を高め、心豊かに成長していくのではないかと、思っています。



広安小学校

全校児童数770人

あいざつ運動を軸に 地域だけでなく世代間もつながる

広安小で特に精進しているのは「あいざつ運動」です。学校運動会やPTA、地域の皆さんが、毎週「あいざつ」ではなく、運動会のある日には、児童たちとあいざつを交わしています。

さらに、地域内にある幼稚園から生徒たちが、出向で、毎週「あいざつ」運動会を実施、小学生に比べて、中学生はさらに大人っぽく使われます。こうした交流から世代間の相互理解が生まれ、いざという時には、地域の場での学生生活が楽しみになるのではないかと、思っています。

広安小では、地域の輪だけではなく世代間の輪もつなげています。



飯野小学校

全校児童数228人

「飯野っ子」たちが 大人と接する場を設ける

飯野小では、大人から積極的に子どもたちとのコミュニケーションを図り、地域の未来を担う「飯野っ子」育成のための取り組みを行っています。

学校運営協議会の中で、あいざつに力をつけている大人も少ない。大人と子どもが接する機会が少ないなどの意見があったことから、田舎と都市とを結ぶためのハスラー学校などを実施しました。これらの「学び」により、親子の絆が強く、地域の輪が広がっていく、立派な飯野っ子になっていくことを目指しています。



Point 学校運営協議会って何？

学校と地域住民などが共に計画を出し合い、学校運営に賛同を促されることで、子どもたちの豊かな成長を支える、役割に基いた仕組みです。保護者代表・地域住民・地域学校協議会代表などから構成され、定期的に協議を行います。

また、協議会を設置している学校はコミュニティ・スクールといわれます。



木山中華學校

全校学生总数 261人

郷土を愛する人材の育成

木山中では、「郷土を愛する人になるために、今、
学校進出協議会ができること」をテーマに、給子証
を制作し年賀状として町内の高齢者に届ける活動
や、学校進出協議会と生徒会ボランティア委員会の



清澤正雄を以て「風のペー」ス
で実証。
また、明後体験学習で、

また、職業体験学習で、地域の人や企業の人と互に交流になってもらい、生徒が緊張感を持って自分の考えを語り合う体験を奨励します。

自ら考え行動する人材の育成

益害中では、「地域への感謝、地域とのつながり」をテーマに、生徒が考える地域との関わり方を形にしています。生徒の主体性が育まれ、自ら地域とつながろうとする生徒の育成につながっています。

生食会執行役が学校運動会委員のメンバーとしてさまざまな要請を出しており、運動部に限ったのではなく、小中学校で行う運動部社の活用も進められた。そこから、小学校でのあいだつ運動会や子ども国生祭典場としての運動会等が実現。高校で大学学生を招いての運動会などの活動へと広がっています。



紫牡丹雙翅

全場學生總數 813 人

連森小学校

合計118人

もしもの時に命を守る
「学び」と食の大切さの伝承

また、林蔵のボランティアによる読み聞かせや九九の朗読、習字、聖書を行っているほか、朝めしや大団



反響を實際に体験したり、地域の人の協力により機下し作りを行うなど「食」に関する学びも積極的にを行っています。

益城中央小學校

YOUNG PEOPLE

地域で見守る登下校と
校舎内外で行われる「学び」

湖区のあちこちで工事が行われている木山地区、大田原町が予定されているため、益城中央では、早急の着下地にスロープが敷設されています。

その周守り活動を行っているのが、学校運動会協賛会を中心とした地域の皆さんです。バスの異動口だけではなく交番などにも立ち、児童が事故に遭わないように気を付けています。

その例にも、バンコン、美濃、和泉線、関ヶ原、生井
はたまた岐阜市内で行う学園から、田村え・新刈り、其



【益域中と木山中の新たな交流】

合同あいさつ運動

益城牛と木山中とのオンライン交流会は、毎年11月11日（土）午後5時から8時（JST）で開催。主催は、益城牛の生産者団体「益城牛の会」で、協賛は、木山町と益城町の両市が担っている。



www.elsevier.com/locate/jmb

